

作詩表 (コピーしてお使いください。)

A (平起式)

	1 ●		2 ●		2 ●		1 ○
	○		●		●		○
	2 ●		1 ●		① ●		2 ●
	●		○		○		○
	3 ●		5 ○		4 ●		3 ●
	○		●		●		○
	◎		●		◎		◎

B (仄起式)

	2 ●		1 ●		1 ●		2 ●
	●		○		○		●
	① ●		2 ●		2 ●		① ●
	○		●		●		○
	4 ●		6 ○		3 ●		4 ●
	●		○		○		●
	◎		●		◎		◎

*注意

- (イ) 同じ文字を二回使用しない (日日などはよい)。
 - (ロ) ①の箇所に●印のあるものはなるべく入れない。
- 入れた場合、次の文字の一番上の文字は平韻を使用する。

- は平韻の文字。●は仄韻の文字。
- は平韻・仄韻、どちらの文字でも可。
- ◎は押韻 (韻をふむ。詩句のまとまったところ) で同じ韻目の文字を用いることのこと。

●識人	●風催	●雲端	●晴煙	●雪消	●人稀	●來時	●鳳凰	●撲窓	●不知	●洞庭	●夕陽	●旗翻	●北枝	●波紋	●天含	●翠微	●波平	●梅花	●新年
ひとをしる ひとをみる(その人なりを知る)	かぜはうながす 風はくを促している	うんたん 雲のはし	せいえん 晴れた霞	ゆきしやうして 雪が解けて	ひとほまれなり 人ほまれなり(人物は少ない)	きたるとき 来る時	ほうおう 想像上のめでたい鳥	まどをうって (花が)窓を打つ	しらぬい 知らない	どうてい 洞庭湖	せきやう 夕日	はたひるがえって 旗が風になびいて	ほくし 北側に出た枝	はもん 波の模様	てんはぶくんで てんはくを含む	うすみどり色 うすみどり色	なみたいらかたして 波は静かで	ばいか 梅の花	しんねん 新年
●九天	●煙花	●風輕	●水明	●月移	●蘭香	●春來	●湖波	●流鶯	●千条	●東風	●香飛	●維舟	●江亭	●無塵	●台頭	●坐看	●晴時	●春風	●新鶯
きゆうてん 大空	えんか かすみや花	かぜはなごやか 風はなごやか	みづあきらかに 水は清く	つきうつって 月は(西へ)傾いて	らんこう 蘭の香り	はるきたって 春になった	こほりなみ 湖の波	りゆうおう 枝をめぐるうぐいす	せんじょう 多くの枝	とうふう 春風	かうとんで 香りが飛んで	ふねをつないで 舟を繋ぐ	こうてい 入り江の茶店	きれいである きれいである	うてなのほとり うてなのほとり	ざしてみる(まをみる) 座してみる(何となく見る)	はれたとき 晴れたとき	しゅんぷう 春の風	しんおう 初春のうぐいす
●門合	●每乘	●初過	●半晴	●玉楼	●暖隨	●後推	●数枝	●尋花	●吟詩	●上春	●人家	●野峰	●渚梅	●断霞	●半遮	●隴頭	●初開	●船頭	●崖根
もんがひ 門はくを含んで	まいりょう 毎夜	はじめてすぎて はじめてすぎて	なかにぼはれ 半分晴れる	ぎよくろう 美しい高殿	だんはしたかう 暖かくなつて	のちにおけ すすめる	すうし 数本の枝	はなをたずね 花見に行く	しをきんじ 詩を作る	じやうしゅん 初春	じんか 人の住む家	やほう 野の峰	しよばい 渚の梅	ちぎれちぎれに立つ霞 ちぎれちぎれに立つ霞	なかにぼはれ 半ばをくが遮り	ろうとう 隴山のほとり	はじめてひらく 初めて新芽出る花を咲く	せんとう(せんとう) 船を漕ぐ人(船の頭(きき))	がけのし がけの下
●春衫	●苦寒	●一冬	●浮香	●山雲	●滄洲	●洞桃	●臘梅	●翠添	●樓頭	●波清	●夜深	●陰崖	●晚風	●鏡湖	●寺前	●輕雷	●疎梅	●山連	●青山
しゅんさん 春の衣服	くかん 厳しい寒さ	いっとう 冬	うきかう 漂いくる香り	さんうん 山にかかる雲	そうしゅう 青い水に囲まれた中州	どうとう 洞穴の近くに咲く桃	ろうばい からうめ	みどりそえる みどり色になる	ろうとう 高殿のほとり	はみきよく 波が清らかである	やしん 夜が更ける	いんがい 日の当たらない崖	ばんぷう 夕暮れの風	こほりのな 湖の名	じぜん 寺の前	けいらい 少し鳴るかみなり	そばい まばらな梅	やまはつらなつて 山が連なる	せいざん 青い山
●帶波	●漸濃	●猶憐	●酒辺	●万重	●全添	●潮声	●看雲	●垂楊	●花枝	●鳥啼	●亭辺	●湖山	●光陰	●荒荒	●春波	●寒山	●幾行	●水添	●海光
なみをおびて 波をおびる	やとこまやかに やとこまやかに	なのおわれむ(ことし) ちやうどあわれむ(まを)	しゅへん 酒宴の席	ばんちやう 幾重にも重なる	まつたくそゆる すべてそえる	あしやせい 潮の音	くもをみる 雲を見る	すいよう 柳	かし 花の枝	とりなく(き) 鳥が鳴く	ていへん あずま屋のほとり	こほり 湖や山	こういん 年月・時間	こうこう 薄暗いこと	しゅんぱ 春の波	かんざん 寒い山	いくこう いくつつか	みづそえる 水はくを添える	かいこう 海的光

● 過後	● 迎我	● 日漏	● 樹隠	● 春水	● 竜馬	● 忽覚	● 閉戸	● 同是	● 柏葉	● 春浪	● 御柳	● 梅蕊	● 南浦	● 空碧	● 春入	● 桃葉	● 路近	● 勝地	● 且醉
くが吹いた後	私を迎える	日が射して	木が見えない	春の川	神馬・すぐれた馬	にわかに思う	戸外へ出ない	同じ	柏の葉	春の波	宮中の柳	梅の花	南側の浦	みどり色の空	春になつて	渡し場の名前、桃の木の葉	道近くして	地形の優れた地	酔う
● 欲過	● 林外	● 凍雪	● 宮殿	● 万戸	● 雲淡	● 山秀	● 梅影	● 春送	● 山色	● 西下	● 弱柳	● 寒送	● 花片	● 野岸	● 繫馬	● 水面	● 有酒	● 山影	● 夜雨
過ぎようとほつす	林の外	凍った雪	天子の御殿	多くの家	雲があわい	山高く	梅の影	春はを送る	山の景色	西方に行く	なやな柳、柳の若枝	寒さが過ぎて	花びら	野の岸	馬を繫いで	水の表面	酒がある	山の影	夜の雨
● 滴砌	● 美酒	● 疎雨	● 晴払	● 花巷	● 先薦	● 春日	● 幾日	● 残雪	● 問柳	● 作賦	● 物色	● 近水	● 林鳥	● 江柳	● 横映	● 細草	● 流水	● 江上	● 柳眼
石畳にしたたり落ちる	おいしい酒	小雨	晴れてくる	花咲く村里	まず薦める	春の日	数日	消えないで残った雪	柳を見る	詩歌を作る	景色	水辺に近い	林の中の鳥	江の柳	横に映る	細かな草	流れる水	江のほとり	柳の新芽
● 深処	● 香綻	● 寒柳	● 山碧	● 湖面	● 微雨	● 日午	● 春信	● 山下	● 亭上	● 劍水	● 小雨	● 開処	● 台枕	● 暁気	● 簾映	● 古樹	● 特為	● 月色	● 野馬
深いところ	花が咲き始め	寒々とした柳	山がみどり色である	湖の水面	こさめ	昼	梅花を添えた書信	山の下	あずま屋のほとり	地名	こさめ	開いたところ	高殿がある	明け方の気	簾に映ずる	老樹	特にこのために	月の光	かげろう
● 半落	● 聴雨	● 風月	● 桃李	● 野色	● 澹澹	● 無数	● 帰雁	● 雪汁	● 霞映	● 玉頰	● 風掠	● 連日	● 江草	● 宿雨	● 消瘦	● 庭竹	● 緑水	● 紅樹	● 巖雪
半分ほど落ちた	雨の音を聞く	風と月、自然のけしき	桃やすもも	野原のけしき	水の揺れ動くさま	数限りなく多くあること	帰っていく雁	解けた雪	霞が映える	玉のように白く美しい頬	風が吹く	何日も	江の草	前夜からの雨	痩せている	庭の竹	みどりの水	紅い花	岩の雪

● 自生煙	● 万家煙	● 一溪煙	● 淡春煙	● 夜調絃	● 古人賢	● 不容賢	● 杏花天	● 水如天	● 接青天	● 碧雲天	● 大如天	● 染吟箋	● 得詩箋	● 立風前	● 一樽前	● 酒杯前	● 大江前	● 一灯前	● 一声先	● 嶺梅先
自然に煙が生じる	多くの家の煙	溪谷のもや	春のもやが薄	夜に弦楽器の調子を合わせる	昔の賢人	賢人が世に用いられない	あんずの花が咲いている	川や海が空のようである	青空に接する(かのように)	みどり色の空	天のように大きい	詩を書く	詩を書く紙を得る	風の前に立つ	一つの酒樽を前にする	お酒の杯を前にする	大きな川を前にする	一つの灯を前にする	まず(鳥の声が)一声する	峰の梅がまず咲く
● 五雲辺	● 石崖辺	● 枕書眠	● 看山眠	● 不勝妍	● 利名牽	● 夢相牽	● 立山巔	● 酒成顛	● 憶前年	● 不知年	● 樂新年	● 已新年	● 已多年	● 鳥耕田	● 憶春田	● 入春田	● 故人憐	● 我堪憐	● 不生煙	● 淡如煙
五色の雲のあたり	石の崖のあたり	山を枕にして眠る	山を見ながら眠る	美しさに勝るものはない	名譽・利益にこだわる	夢を見る	山の頂上に立つ	酒は気違いになる	前の年を思う	幾年(いくつ)か知らない	新しい年を祝う	もう新年となる	もう多くの年が過ぎた	鳥が田んぼで餌をつつく	春の田を思う	春の田にうが入る	友人があわれむ	私はあわれみにたえて	煙が發生しない	煙のように薄
● 不成篇	● 淚漣漣	● 暮雲連	● 景依然	● 夢依然	● 一囊錢	● 雨声残	● 不論錢	● 乍詩仙	● 飲中仙	● 作飛仙	● 盡如仙	● 不生塵	● 汲清泉	● 臥林泉	● 竹間泉	● 取寒泉	● 聽流泉	● 更高懸	● 一帆懸	● 夕陽辺
詩や文章が出来ない	涙が流れる姿	夕暮れの雲が連なる	景色が昔のまま	夢はもとのまま	ポケットのお金(少額のお金)	雨の音が残る	お金のことは言わない	瞬間に詩を作る仙人(書生)となる	酒飲み仙人	空を飛ぶ仙人になる	みんな仙人のようである	きれいである	清い泉の水をくみ取る	林や泉に臥せる(隠遁のところをいう)	竹やぶから出る泉	冷たい泉を取る	流れる泉を聴く	より高いところにかかる	一つの船の帆がある	夕日のあたり

●●● 響夜弦	●●● 夜雨弦	●●● 天下賢	●●● 可比肩	●●● 志愈堅	●●● 意已堅	●●● 晚更堅	●●● 風滿天	●●● 不怨天	●●● 水際天	●●● 月在天	●●● 風雪天	●●● 暮雨天	●●● 得画箋	●●● 酒十千	●●● 費十千	●●● 水影前	●●● 落日前	●●● 落木前	●●● 月最先	●●● 報客先
よるにひびくげん 夜に琴に音がひびく	やうのげん 夜雨の琴の音	てんかのけん 世の中で最高の賢い人	かたをならべるべし(く) 肩をならべる	こころざしいよいよかたし(く) 志がますます堅くなる	いすてにかたし(く) 意志はもう堅く決まっている	ばんざらにかたし(く) 夜が更にながれる	かぜにんにみつ(ち) 風が空にいつぱい	てんをうらまはず 天を怨んではいない	みづきわのてん(すいさいのてん) 水平線	つきてんにあり 月は空にある	ふうせつ(つゆ)のてん 風と雪の空 ふぶきの空	ぼう(つゆ)のてん 夕暮れの雨の空	がせんをえたる・がせんをえたり 書道または水墨画を書く紙を得る	さけじゆ(う)せん 大量の酒	じゆ(う)せんをついやす(し) 大金を使う	すい(えい)のまえ 水に映る影の前	らく(じつ)のまえ 日が沈む前(夕日の時)	らく(ぼく)のまえ 枯れ木の音	つき(はつ)のまきん(ず) 月が一番先に出る	きやく(に)ほり(する)を(さ)きん(ず) お客に先に報告がいく
●●● 小雪辺	●●● 野水辺	●●● 聴雨眠	●●● 未肯眠	●●● 伴醉眠	●●● 白日眠	●●● 人未眠	●●● 老更妍	●●● 古木巔	●●● 放酒顛	●●● 不待年	●●● 不記年	●●● 不計年	●●● 如少年	●●● 眞可憐	●●● 春可憐	●●● 意可憐	●●● 後世憐	●●● 頂上煙	●●● 竹外煙	●●● 勝管弦
しょうせつ(つ)のほとり 少し雪が降るあたり	や(すい)のほとり 野にある水辺	あめ(を)きいて(ねむ)る(り) 雨の音を聞いて眠る	いまだ(あ)えて(ねむ)らず まだ眠らないようにする	よ(い)を(と)もな(って)ねむ(る)(り) 酔いに任せて眠る	ひやく(じつ)の(ねむ)る(り) 昼寝をする	ひと(い)まだ(ねむ)らず 人々はまだ眠っていない	お(い)て(さ)ら(に)け(ん)なり(に) 年をとって更に美しい	こ(ぼ)く(の)てん 古木の一番高いところ	さ(け)を(は)な(つ)のてん 酒を飲んで狂う	とし(を)ま(た)ず 年月が来るのを待たない	とし(を)し(る)さ(ず) 年月を覚えていない	とし(を)は(か)ら(ず) 年月を計算しない	し(よ)う(ね)ん(の)こ(と)く(し) 少年のようだ	は(る)あ(わ)れ(む)べ(し)(く) 春はあわれむべし	は(る)あ(わ)れ(む)べ(し)(く) 春はあわれむべし	い(あ)わ(れ)む(べ)し(く) 気持ちは憐れむべきである	こ(う)せ(い)あ(わ)れ(む)(む) 後の世にあわれむ	ち(やう)じ(よ)う(の)け(む)り (山の)頂上にある霞	ち(く)が(い)の(け)む(り) 竹やぶの外の霞	か(ん)げん(に)ま(さ)る(り) 音楽よりもすばらしい
●●● 月正円	●●● 載酒船	●●● 客喚船	●●● 何處船	●●● 断後縁	●●● 月満川	●●● 樹満川	●●● 春色偏	●●● 落日連	●●● 詩酒筵	●●● 亦愴然	●●● 亦偶然	●●● 不值錢	●●● 買醉錢	●●● 乞酒錢	●●● 遠色鮮	●●● 山更鮮	●●● 如水仙	●●● 是酒仙	●●● 聞夜泉	●●● 夜月懸
つき(ま)ま(さ)に(ま)ん(ま)る 月が今まさにまんまる	さ(け)を(せ)い(する)の(ふ)ね 酒を積んだ船	きやく(ふ)ね(を)よ(ぶ)(び) 旅人が渡し船を呼ぶ	いづ(れ)の(と)ころ(の)ふ(ね)ぞ どこかの船か	こ(う)えん(を)た(つ) 以後の縁を切る	つき(か)わ(に)みつ(ち) 月が川に(大きく)映る	ち(く)わ(に)みつ(ち) 川辺に樹木がいつぱいになる	し(ゆん)し(よ)く(あ)ま(ね)し(し) 春の景色があふれる	らく(じつ)の(つ)ら(なる)(り) 夕日の光が連なる	し(し)ゆ(の)えん 作詩と酒の宴会	また(さ)う(せん)たり(また)さ(う)せん(として) また悲しみいたむ	また(さ)う(せん)たり(また)さ(う)せん(として) また悲しみいたむ	お(金)と(は)開(係)ない お金とは関係ない	よ(い)を(か)ら(う)の(せ)に 酔っぱらうぐらいの酒をかうお金	し(ゆ)せん(を)こ(う)(い) 酒をかうお金をねだる	えん(し)よ(く)あ(さ)か(なり) 遠くの景色があさやか	や(ま)さ(ら)に(あ)さ(か)なり 山が更にあさやかになる	すい(せん)の(は)の(よう)だ 水仙の花のようだ	酒(の)仙(人)(酒(飲)み)である 酒の仙人(酒飲み)である	や(せ)ん(を)き(く)(き) 夜の泉の音を聞く	や(げ)つ(か)か(る)(り) 夜の月が空にかかる

天地好	初散雪	三弄笛	芳草合	回暖气	輕舞蝶	藍尾酒	随處好	沽酒路	開又落	臨複道	浮綺席	随鶴跡	纒欲暖	来往屐	春意動	新歳酒	愁裏色	明旭日	如酒緑	残照紫
てんちよし	はじめてゆきさんず(七)	みたびふえをうす(七)	ほろほろが(つす)(七)	だんきかえる(り)	けいぶのちよう・かるくまうちよう	らんびのさけ	いたる(ことろよ)	酒をかうのみち	ひらきまたおつ(七)	ふくどうのぞむ(七)	きせきにうかが(七)	かくせきに(した)がう(七)	わすかに暖かくなつた	下駄で行き来すること	春の訪れ	しんさいのさけ	うれえ悲しむようす	朝日に輝く	みどり色の酒のようである	ざんしょうむらさきなり

還家路	小枝玉	蟠龍虎	連宵出	春猶冷	梅仍在	晴窓裏	随佳色	衝橋脚	留人跡	聞鶯語	寒仍緑	春如夢	来杯面	催花雨	鶯呼客	梅初白	江湖闊	青山近	宜逢雪	三杯酒
いえにかえるのみち	小さい枝に玉のような花をつけている	竜や虎がうづくまるようである	夜中まで続く	春はまだ寒い	梅の花がまだ咲いている	晴れた窓のもと	美しい色にしたがう	橋ぐいをさおでついで船をすすめる	人の足跡が残る	うぐいすの声を聞く	寒くてもなおみどり色(松など)	春はまるで夢のようだ	杯の上には落ちてくる	花を咲かす雨	鶯の鳴き声が旅人を誘う	梅が咲く	江と湖は広々としている	青い山が近い	雪が降ってきた	三杯の酒

「春」詩の題名

春	春	立春	迎春	早春	元日	春寒	春日偶成	春日雜興	春曉	惜春
はる	りつしゆん	暦の上の春のはじまり	せいしゆん・はるをむかえる	そうしゆん	がんにつ	しゆんかん	しゆんじつぐうせい	しゆんじつぎつぎよう	しゆんげよう	はるをおしむ